

インド留学記

その6

日常の日々

(2)



澤大 教授
金助島

インドにおける古典学の将来

日本人の私から見れば、インド人の学生は英語もサンスクリット語も私とは比較にならないほどよくできるように思えたのだが、年配の先生がたはよく「今の学生は英語力もサンスクリットの方も昔とは比べものにならないほど低下している」と嘆いていた。あれでできないと言われるのなら、私は一体どうなるのだろうかと驚いて尋ねてみると、次のようなことが分かった。

まず、英語の力であるが、第二次世界大戦後イギリスの植民地から独立したインドは、イギリスの言葉である英語からインドの言葉であるヒンディー語（主に北インドで用いられているアーリア系の言葉）を国語に近い形の全国に通用する言葉にしようとして、ヒンディー語の教育に力を入れた。それはもちろん、特に南インドのドラヴィダ語系を母語とする人たちの強い反発を受けたわけであるが、現在では、私の留学地プーナを例にとれば、小学一年から母語で

あるマラーティー語の授業があり、小学五年からヒンディー語を第二言語として学習し、中学一年から英語を第三言語として学習するという教育システムになっている。その結果、戦後の英語教育を受けた人たちは、たとえば英語で行われている授業のノートを母語であるマラーティー語でとるといふ例にも見られるように、イギリス植民地時代に英語教育を受けた人たちは、中には英語ができない。プーナ大学のサンスクリット学科でも、三〇代の先生が五〇代の先生に論文の英語をチェックしてもらっていると、この光景は珍しいものではなかった。

一方、サンスクリット語教育のほうは、英語よりももっと悲惨な運命をたどった。昔は、パండిット（学僧）と呼ばれる人がいて、サンスクリット語で書かれた宗教文献をサンスクリット語を通して教授・学習するというような形の伝統的な教育機関が数多く存在していた。し

かし、現在では、サンスクリット・カレッジと呼ばれるごく少数の教育機関を除いて、このような形の伝統的な教育システムはあまり残っていない。さらに、中等教育でのサンスクリット語の位置は、プーナではヒンディー語との選択科目とされており、現在用いられているヒンディー語とは違って今ではほとんどだれも喋る人はいない古典語であるサンスクリット語を選択しようなどという変わり者は数少ない。そうすると、中学・高校 (Secondary School) にはサンスクリット語の先生はあまり必要なくなってくる。とすれば、大学や大学院でサンスクリット語を学んでも、大学に残って研究者になる以外には職がないということになってくる。一つにはそんなわけで、サンスクリット語を学習してサンスクリット語で書かれた古典を読んで研究しようという人は減っていくことになったのである。

さらに、近代化・工業化を押し進めている国インドにとつてまず重要なのは、それに役立つ学問を収めた人たちである。法学部や工学部や医学部に行って、官僚やエンジニアや医者になったほうがなんといつても実入りが多い。サンスクリット語を学んで古典を研究したところでは金にはならない。日本のように何をやってもなんとか食つていけるような国なら、古典を研究して優雅に暮らすというのもリッチだけれど、インドには食えない人がたくさんいるわけだし、大学や大学院までいける人たちというのが全体から見れば数少ないのだから、法学部や工学部や医学部に行ってまず経済的に豊かに暮らせるようにと考えるほうが理にかなっているというわけだ。そんなわけで、優秀な学生はまず法学部や工学部や医学部を目指すことになる。もちろん例外はどこにでもあるわけだけれど、優秀な学生がサンスクリット学科に来る割合は

一般的に言つて極めて低いということになる。そのせいであろう。私の先生の一人(当時四〇歳位)が嘆いていた。「私の学生のころはこの本一冊(『ブラフマ・ストトラ・シャンカラ註』全五百頁程度、金倉田照訳『シャンカラの哲学上・下』春秋社刊で全一四五頁)が一年の期末試験の一科目分の試験範囲だった。今ではその三分の一が試験範囲なんだよ」と。また、マングールさん(インド古典研究の由緒ある研究所であるバンダルカル東洋学研究所の図書館員)が冗談めかして悲しそうに言っていた。「インドの古典を研究しようと思つたら、そのうち、インド人がドイツに行って学んでこななければならぬということになるだろうね」と。自国の古典を他国に行つて学んでくる状況はとても悲しいことにちがいない。特に自国の精神文化にたいして誇りを持つているインドの人たちにとっては。しかし、現状では残念ながら、将来は

そうなりかねないと私にも思えるのである。これがいわゆる近代化というものなのであるだろうか？

私の個人授業

大学で修士課程の正規の授業に出たのは週二科目四コマだけだったが、それにも十分ついていけなかった。そのため別に個人授業を受けることにした。先生たちは修士課程の授業としては週に一科目二コマ教えるだけで、あとは博士課程の学生の論文指導と自分の研究の時間ということで、雑務もそれほどなく時間的には余裕がありそうだった。ただし、日本の大学のように授業と会議がない日は大学に来なくてもいいというようなことはなくて、いつでも一時から五時までは研究室につめていなければならぬということであった。

学科長のジョシ先生に頼んで先生を二人紹介

してもらった。一人はバテさんというサンスクリット文法学が専門の美人のお姉さん（当時は研究員であったがジョシ先生退官後の現在は学



科長になっている)で、もう一人はラフルカルさんであった。この人はヴェーダが専門だが授業ではヴェーダーンタを教えている五〇代なかば位

の人で、褐色のほていさんが眼鏡をかけたように見るからに人のよさをうなおじさんだった。

バテさんからは、将来的には専門のサンスクリット文学の初歩でも習うことにしても、今のところは基礎的なサンスクリット語の能力を養成してもらうことにした。私はすでに日本で大学二年の後期から修士の一年の前期まで三年間もサンスクリット語を学んではいたのだが、なにしろ日本でのサンスクリット語の教育といえば、大学二年の後期に週二コマ、英語でいえば中学一・二年程度のテキストを使って勉強したと思っただけで、三年になるとシェークスピアの作品に相当するようなものを突然読み始めるというようにレベル差が激しい。それで語学としてのサンスクリット語能力という点では、その時点ですでに落ちこぼれてしまっているという意識が私にはあったからである。そこでまず最初に、英語で言えば中学一・二年の文

法の教科書に相当する『サンスクリット・マニユアル』を教えてもらった。それは練習問題が読解編と作文編に分かれており、さすがに読解編は自分でもやれたのでサンスクリットの作文を添削してもらうことにした。バテさんは当然予習などしてこない。私のほうは、三・四時間かけて四苦八苦して英語の文章をサンスクリット語に翻訳してくる。バテさんはフンフンといながら見るまに私の作文の誤りを訂正していく。こんな日々が二・三ヶ月続いた。次に、日本で大学三年のときに一部だけ読んだことのある『ナラ王物語』（ナラ王とその妻ダマヤンティーの愛の物語）を全部読むことにする。しかし、バテさんはただ読むだけでは解放してくれない。読んだ箇所の要約をサンスクリット語で書いてこいというのだ。そのときのノートはもうないが、とにかく毎日相当の時間をかけてそれをなんとかこなした。そして次は、インドのイ

ソップ物語『パンチャタントラ』（五つの物語）である。これも同じように読んだ箇所の要約をサンسكريット語で書いてこなければならないのだ。なんでこんなえらい思いをしてこんなことをやらなければならないのだろうと何度も思った。「古典語であるサンسكريット語を日常的に喋っている人なんかほとんどいないのだから読めるだけでいいではないか。なんで作文なんかやらなければならないのだろう」と。しかしそのうち分かってきた。サンسكريット語は日本の漢文や古文よりもずっと生きた言葉なのだと。バテさんは別段伝統的なサンسكريット語の教育を受けた人というわけではないのに、サンسكريット語で流暢に喋ることができた。バテさんは、年に一度学科でサンسكريット語で劇や小話をやる催しの際にはいつも、サンسكريット語で司会をしていた。また、サンسكريット劇の脚本を書いて、その劇が賞を受けた

こともあった（もちろん私にはその劇の内容は目では理解できても耳では理解できなかったが）。また、サンسكريット語で詩を作るのを趣味にしているパルスレーという先生も学科にはいたし、デツカン・カレッジからはサンسكريット語で授業をやっているシュリニヴァース等の先生も来ていた。日本では全く死に絶えた古典語だと思い込んでいたサンسكريット語が、ここインドではごく限られた範囲ではあるものの依然として生きているのだ。このことはショックだった。しかし、そんなわけで、ともかく真面目にサンسكريット語の作文をやり続ける気になったのであった。そしてそのせいで後に、インドの高校生相手にサンسكريット語で講演をやったり、大学の学科の人たちを相手に落語の「ときそば」をやったりする羽目になるのであるが、そのことについてはまた機会を改めて述べることにしよう。